

王者・多摩 OL 3 連覇！

多摩 OL 監督
菅原 琢



多摩 OL
堂々のウイ
ングラン

クラブカップ 7 人リレー
(長野県伊那市)
2001 年 9 月 9 日

大会規模日本一となったクラブカップ。台風直前の暑い天気の中、多摩 OL は「渋谷で走る会」とのデッドヒートを制し、見事 3 連覇を果たした。

準備した、勝った、泣いた

史上最高の結果が待っていた。A チームは 3 連覇で 5 度目の優勝を飾った。9 回の大会で 5 回の優勝である。優勝を譲ったのは(純粋な地域クラブでは)京葉 OL クラブに 1 回だけである(あとは、白樺と渋谷が 2 回)。20 世紀と 21 世紀の両方にその足跡を残すことができた。

初めて 5 チームをエントリーすることができた。そしてすべてのチームが例年の通り、当たり前のように完走した。今年は全チーム、ウムスタートなしというオマケもついた。

最後のチームがゴールするまで応援は続いた。We're king of club.

「窮鼠猫を噛む」

「プロジェクト X (エックス)」……今更説明の必要はないだろうが、NHK で放送されている、不可能と思われたことに挑んだ人たちの物語である。(中島みゆきの曲が実にハマっている。)今回の勝利は我々の「プロジェクト X」だった。10 年経っても今日の記憶は色あせずに残っているに違いない。

渋谷の 7 人は全員が E 権を保持し、5 人が日本ランキング 1 桁(最新のランキングによる)。多摩の選手は E 権を持っていない人も何人かいるし、ランキング 1 桁のエース級の選手はゼロ(一部に誤解があるようだが、多摩はバリバリのエリートクラブではない。絶対的なエースは不在、学生時代目立った成績を残した選手すらいないのである)。誰がどう考えたって、渋谷の圧倒的優位は揺るぎない。真偽は定かではないが京葉の松澤が「今年の渋谷には勝てない」と漏らしたという話を聞いたくらいだ。

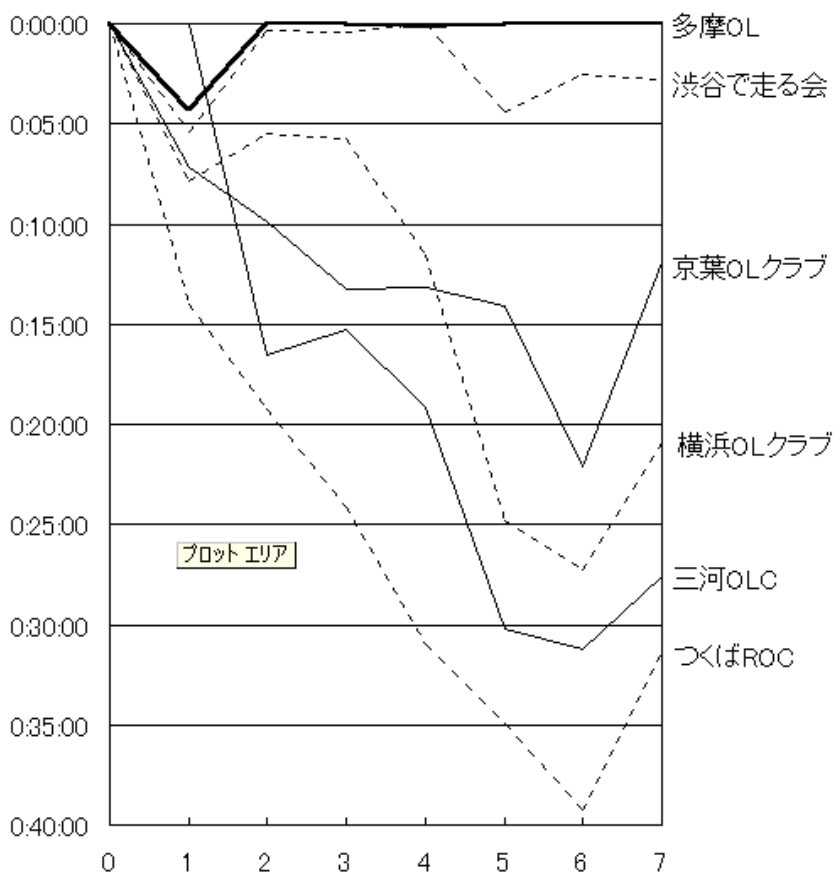
しかし、じっくり準備してきたチームと、急造チームの差が勝負を分けた。最後まで勝負を捨てなかった、勝ちにこだわった我々に

勝利の女神は微笑んだ。(実際は「勝ちたい」よりも「負けたくない」の一心だった。)

1 走と 5 走以外、逆転され、あるいは背中を見られるところまで追いつめられながら、屈しなかった。スター軍団を相手に一步も退かなかった。リレーで要求される走りを全員が忠実に実践した。ミスの多いチームが、負けた。

半月以上経った今でも、レースのことを思い出すと目に涙が浮かんでくる、ドキドキしてしまう。私にとってそれほどにクラブカップというのは想いの深いレースなのである。そして、多くの仲間(決して A チームに限った話ではない!)もその想いを共有していると思う。

1 走・竹内は女子トップの快走で志村に 1 分の差を付ける。2 走・菅原は 1 番でいきなりミスをして気づかぬうちに加賀屋に逆転を許す。後半、一旦追いついたが、直後のミスで逃げられる。しかしラス前で再度逆転。3 走・円井も前半で安良に追いつかれ、先行を許すがラスポで再逆転。4 走・ヨルクは前半で羽鳥に追いつかれ、



クラブカップ7人リレー2001 上位成績
2001 年 9 月 9 日長野県伊那市

クラブカップ

1	多摩OL A	4:24:00
2	渋谷で走る会 A	4:26:47
3	京葉OLクラブ A	4:35:55
4	横浜OLクラブ A	4:44:54
5	三河OLC-B	4:51:37
6	つくばROC-B	4:55:23
7	チーム白樺 B	4:57:19
8	渋谷で走る会 B	4:59:15
9	OLP兵庫-A	5:05:13
10	入間市 OLC-A	5:05:37
11	ES 関東 C-A	5:05:40
12	東京 OL クラブ-A5	08:23

ベテランカップ

1	OLP兵庫-C	3:09:30
2	愛知 OLC-A	3:19:55
3	サン・スーシV	3:34:19
4	入間市 OLC-C	3:42:52
5	東京 OL クラブ-V3	43:47
6	松阪 OLC	3:58:46

後半も苦戦したが僅か8秒遅れで後続に繋ぐ。5走・山田はへの誘導途中で金並を抜き去り、最高のタイムで帰ってくる。しかし、彼女も驚異的な走りでその差は4分しか開かない。6走・多田は途中で鹿島田に2分半にまで詰められた。さらに終盤、彼に背中を見られるところまで迫られながら、2分半のリードでゴール。誰もが息を呑んだはずである。その後、一番恐い京葉・松澤は20分遅れで出走。ここで初めてレースは多摩と渋谷のマッチレースとなった。

そして7走・上坂、前半をまずまずにまとめ篠原との差を4分半にまで広げた。が、そこからが長かった。終盤ミスを重ね、ゴール間近の15番、一度は篠原に先行を許した。

永遠とも思える時間が流れた。みんなが待ちこまえる最終コントロール(17番)に最初に姿を現したのは、上坂だった。ウイニングランは我々のものだった。

私のクラブ論

オリエンテーリング人口が減っている。我々を取り巻く状況は非常に深刻である。東京近郊の公認大会でも1000人の選手を集められない。いろいろな要因があるにしろ、その現状に真剣に目を向けなければならない時期であろう。今や選手動員で1000人の大台を狙えるのは学生選手権とクラブカップだけである。それで良いのか？

重複があるとは言え、7人チームが150チームも出場する大会というのは本当に凄い、素晴らしい事だと思う。いや、もっと重複出場してもらいたいくらいだ。重複出場する人が増えると言うことは、のべ参加者が増えて大会がますます賑やかになるということだからだ。

ただ、敢えて言いたい。クラブカップには「クラブ」から出場して欲しい。地域クラブに所属している人はまずそちらをもち立てる。地域クラブに入っていない人はまず、自分の居場所を探してみる。

そこからじゃないかな。

「戻って来る場所がここにある！」がこのイベントのキャッチフレーズだった。良いコトバだと思った。「帰るところがある」って素晴らしい。

JWOC・XX年組、とかSWOC・XX年組など、日本代表チームの同窓会が正規として認められるならば、当然、今年の世界選手権代表選手のみでWOC2001組を組んでも認められる！？ そんなチームがあれば、当然のように優勝するだろう。それをみんなは是とするのだろうか....。

何をもって「正規チーム」とするのか....。「それを決めるのは参加者だ」と山川社長は言う。今まで公式に提訴したことはないが、要項のレギュレーションから逸脱している「クラブ」が多数存在しているのは非常に不満。「活動を共にし.....」を厳格に適用してくべきではないだろうか。(私の解釈では、活動というのは普通のオ

リエンターリング活動を指しているのだと思う。)

クラブカップ(CC7)のためにクラブ(チーム)を編成するというのは本末転倒だと思う。クラブをもち立てるために、CC7を目標にがんばるべきなのではないだろうか? 助っ人を使ってまで無理に正規で完走するよりも、クラブ本来の力で(たとえオープンとなっても)完走を目指すべきではないのだろうか。

CC7の理念という点で言えば、幅広い世代が集まるクラブを大切に、発展させていこう、CC7を機会にクラブの結束を高めていこう、というのがCC7の理念じゃないかと私は理解している。(表彰式の私のスピーチにいただいた拍手に、そう感じている方が少なくないのだと感じた)

単に数合わせで7人揃えたらそれで「正規」なのか? ユニフォームを揃えればそれで「正規」なのか? CC7の理念に共鳴して初めて「正規」なのではないだろうか?

CC7の楽しみ方は千差万別で良いと思う。クラブカップは、クラブカップであってどこにも「地域クラブ」カップとは書いていないし、1人でも多くの人がCC7を楽しみに出てくることは良いことだと思う、素晴らしいと思う。1年に1回しかOLをやらない人がCC7の会場にいる、素晴らしいと思う。それでも、やはり日本のOL界が良くなっていくためには「地域」がしっかりしていかなければいけないと思う。だから、「地域」に所属していない人にはぜひ「地域」のクラブに所属してもらって、「地域」の立場からCC7に熱くなって欲しいと思う。同期会・同窓会・同人会?といった類のチームを否定はしないが、まず、地域のチームから出走した後で、2回目の出走で旧交を温めてはどうだろうか?(実際そういう人も少なくない)

せっかく、地域に所属していながら、そちらから出走せずに同期会・同窓会・同人会から出走する

というのは、いかがなものだろうか? 「うちのクラブから出ても上位争いに絡めないし.....」と感じるなら自分が率先してクラブの強化に取り組みばいいじゃないか。人数が足りないなら2度でも3度でも出走すればいいじゃないか。気づいていないのかも知れないけれど、「帰るところがある」ことは素晴らしい。ふらついている人には早く定住して欲しい。地域クラブに軸足を置いた上で、いろんなことに挑戦してみてもはどうだろうか。

熱く戦っている姿を見て、一生懸命仲間に声援を送る姿を見て、何か感じてもらえれば。地域クラブの門戸を叩いてくれる人が増えてくれれば.....、痛切に思う。

今でこそ言えるけど、今年のCC7、絶対に渋谷には負けられなかった。力と力がぶつかり合った結果、京葉に負ける、兵庫に負けることは受け入れられても、渋谷(と同期会的チーム)には負けられなかった。負けたら、CC7を楽しみにしている多くのクラブのがんばりが否定されると思ったから。(もし京葉に負けていたら、「松ちゃんおめでとう」とスツと手が出たと思う)大袈裟に言えば、CC7の未来のためにも負けられなかった。

注:「渋谷で走る会」は毎週水曜日に陸上競技場で一緒にトレーニングしている仲間。実は、私や京葉・松澤も渋谷で一緒に走っている仲間だったりする。

負けて非難めいたことを口にしたくなかった。勝った上で、クラブ論を口にしかかった。この文書を書かせてもらうということも私にとって大きなモチベーションだった。

オリエンターリングを楽しむ以上、時には楽しませる側にまわる、という義務がついてまわる。これが普通のランニング大会とは違う点だ。OL界の美しい一面だとも思う。学生はインカレを頂点とする学生の世界で燃えて良いと思う(インカレ偏重は是正されるべきだろう)でも社会人になったら、責任は果たそうよ。大学と一緒にオリエンターリングまで卒業せずに、地元で、新天地で、クラブに入ってみようよ。インカレだけがエリートだけがオリエンターリングじゃないんだ。誰にでも活躍の場はある。それに気づいて欲しい。

多摩OLの強さを内側から知るとのも良いだろう。実際、「多摩のチームで走りたかった」が入会動機だった人も少なくない。打倒多摩のために他の地域クラブに入ると



いうのならそれも歓迎だ。地域クラブが活発になっていくこと、それはオリエンテーリング界が豊かになっていくこと。それこそがクラブカップがもたらす副次的な産物なのだから。

元XX代表やエリートの選手は地域の核になれるポテンシャルを持っている。それを使わずどうする！それが有効に活用されていないのが現在の日本のOL界ではないだろうか？

我々が「頭の固い連中」と思っている人たちが「競技中心の人たちは...」と反感をいだく理由の一部は我々側にもある、最近そう感じている。

さまよえる羊たちよ。帰る場所を探そうぜ。

もっと楽しもう！

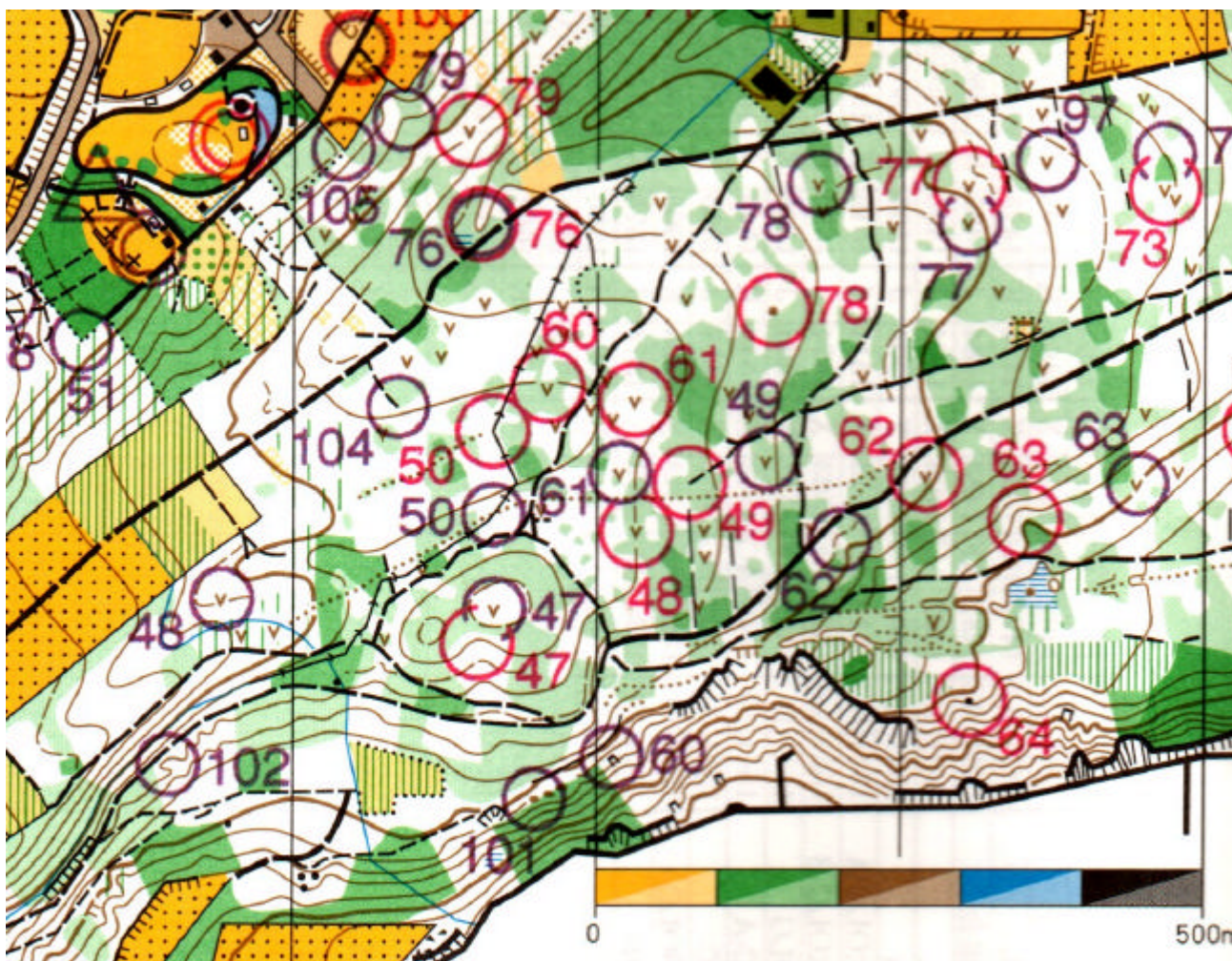
来年、もっともっと楽しもうじゃないか。どうすればいい？それは準備の過程から楽しめばいい。クラブ作り、チーム作りから楽しめばいい。喜びはそのイベントに注ぎ込んだエネルギーに比例する。レースの結果はCC7の一面でしかない。参加者が楽しめれば（礼儀・マナーを守ってだぞ！）主催者だって楽しいはずだ。山川社長と共催チームを喜ばせよう。

とは言え、楽しくやるには完走することは必要だ。失格しない方法を伝授しよう。コントロールに着いたら、パンチの前に地図とパンチ台の番号を照合すること。それと、地図置き場を事前に視察しておくことだ。誰にでもできる簡単なことだ。

最後になりましたが、病魔と闘いながらこの素晴らしい舞台を提供して下さった山川社長と、水簾刈の皆さんに讃辞と感謝を。

そして17歳から71歳まで多摩のチームで走った仲間たち、一生懸命応援してくれた会員の家族たちにも感謝を。さぁ、祝勝会だ！

文中の敬称は省略させていただきました。お許し下さい。渋谷に対して厳しすぎる、と思われるかもしれませんが、私自身、渋谷の人間として、ポテンシャルのある仲間たちに地域で活躍して欲しいのです。もし、「TAKUさん、渋谷チームで走って下さいよ」と打診があれば、喜んで2回目の出走を引き受けると思いますよ。



クラブカップに使用したO-map「信州伊那谷 鳩吹公園」

伊那市民の手によってゴルフ場開発より守られた平地林「ますみの森」が、メインを占める。ここは主催団体のひとつ「水簾刈」のホームテレーン、「戻ってくる場所」なのだ。（本誌に、この地図を同封しています）